

詩篇 85 篇

0 指揮者のために。コラの子たちの賛歌

《恵みの想起》

- 1 【主】よ。あなたは御国に恵みを施し、ヤコブの繁栄を元どおりにされました。
- 2 あなたは、御民の咎を赦し、彼らのすべての罪を、おおわれました。セラ
- 3 あなたは、激しい怒りをことごとく取り去り、燃える御怒りを、押しとどめられました。

《現状を訴える祈り》

- 4 われらの救いの神よ。どうか、私たちを生き返らせ、私たちに対する御怒りをやめてください。
- 5 あなたは、いつまでも、私たちに対して怒っておられるのですか。代々に至るまで、あなたの御怒りを引き延ばされるのですか。
- 6 あなたは、私たちを再び生かされないのですか。あなたの民があなたによって喜ぶために。
- 7 【主】よ。私たちに、あなたの恵みを示し、あなたの救いを私たちに与えてください。

《まことへの立脚》

- 8 私は、【主】であられる神の仰せを聞きたい。主は、御民と聖徒たちとに平和を告げ、彼らを再び愚かさには戻されない。
- 9 まことに御救いは主を恐れる者たちに近い。それは、栄光が私たちの国にとどまるためです。

《恵みとまこと・義と平和への期待》

- 10 恵みとまこととは、互いに出会い、義と平和とは、互いに口づけしています。
- 11 まことは地から生えいで、義は天から見おろしています。
- 12 まことに、【主】は、良いものを下さるので、私たちの国は、その産物を生じます。
- 13 義は、主の御前に先立って行き、主の足跡を道とします。

本篇は、バビロン捕囚から帰還したユダの民が、荒廃した祖国の地で涙している状況で詠われたものと考えられています。ペルシャ帝国がバビロニア帝国を征服したのは紀元前539年のことであり、アケメネス朝ペルシャの開祖であるクロス二世の命令により捕囚民は解放され、神殿再建の援助までも約束されました（エズラ1:2-4）。バビロン捕囚が実施された期間は紀元前586～538年の48年間であり、エレミヤがかつて予告していた「70年」（エレミヤ25:11、29:10）とは幾分差があります。この期間にユダの民はバビロンの地で子孫を残し、新しい世代を引き連れて祖国の地を踏みました。神の審きはこれにて完了したと思われた。しかし、待っていたのは次なる悲しい現実だったのです。帰還民は破壊された神殿を目の当たりにし、涙を流しました。

1～3節では、捕囚の意味していたことが明確に歌い上げられています。それは、民の背信に対する神の審きであったということです。しかし、歴代誌の著者などは、捕囚の期間は神がカナンの地にお与えになった安息であったという見解を述べてもいます。

これは、エレミヤにより告げられた主のことばが成就して、この地が安息を取り戻すためであった。この荒れ果てた時代を通じて、この地は七十年が満ちるまで安息を得た。(Ⅱ歴代誌 36:21)
神はご自身の土地を聖めるために強制的に民を移動させられたとも言えるでしょう。この悔い改めの期間が終わり、主は民をお赦しになりました。民もまた赦されたことを知りました。

4～7節では、あたかも神の怒りが持続されているかのような絶望的な祈りが発せられています。それは、せっかく心弾む帰国を遂げたというのに、目に映ったものは徹底的に破壊された土地だったからです。人は罪赦されても直ちにすべてが元通りになるわけではありません。多くの場合、赦しをいただきながらも罪の刈り取りが伴います。一生かけて償わなくてはならないようなものもあるかもしれません。ここで繰り返されている「御怒りをやめてください」「いつまでも…怒っておられるのですか」「あなたの御怒りを引き延ばされるのですか」という「神の怒り」に焦点が当てられた表現は、詩人の恐れと絶望をよく表しているでしょう。

それに対し、本篇では「悔い改める」が原義である「シューブ」という動詞が様々な変化形でもって繰り返されています。「元どおりになる」(1節)、「押しとどめる」(3節)、「生き返らせる」(4節)、「再び生かす」(6節)、「(愚かさには)戻されない」(8節)。これらの言葉から、悔い改めた民に対する現実的な回復の御業を切に求める詩人の思いが痛いほど伝わってきます。

8～9節では、主語が「私」に変わっています。一人の詩人が民を代表して立ち、御心を聞き取ろうと努めている姿が見えてまいります。この詩人が重視している言葉は「平和」(8節)であり、神と民との良好な関係です。

10～13節には、「恵みとまこと」「義と平和」という美しい神の属性のペアが登場します。

- ・ 恵み……神が与える救いの約束、一方的に契約を守り続けること
- ・ まこと…神の変えることのない真実
- ・ 義………道徳的な完全性、壊れたものを修復する御業
- ・ 平和……完全性、安らぎ

このように、一つずつ言葉を調べていくと、ペアになっているものが見事に調和することが分かるでしょう。「義」には「救い」の意味も含まれているので、神と民との間の平和は救いによって成立すると言われてしていると解釈することもできます。

荒廃した祖国を目の当たりにした民は、神の審きはまだ完了していなかったのだとうなだれました。しかし、神の赦しは確かにそこにあり、回復の御業は始まろうとしていたのです。回復は一瞬にしてなされたのではなく、時間をかけてジワジワと行なわれていきました。神殿再建も度重なる妨害に遭いながら、15年の空白期間も経て、どうにかこうにか実現に至ります。

このことから、赦しを得た人の人生が直ちにバラ色になるのではなく、その人の内に宿ってくださった聖霊の御業によって、人の目にはなかなか分からないけれど確実に、ひと足ひと足回復が与えられていくことが分かります。私たちが焦るのではなく、主の御業が確かに行なわれていることを日々信じながら、時にはこれまで歩んできた信仰の旅路を振り返ってみて、ここまで導いてきてくださった主の御名を崇めるものでありたいと思います。